

「まえがき」にかえて

千々和 到

真夏の暑い中、多くの友人たちと一緒に、汗を流しながら、板碑を探し、記録して、その拓本を採って歩いた日々を思い出す。つらさは感じず、ひたすら楽しかった。そうした調査の結果が文化財の保護に多少は役立つのだろうと思ってはいたが、歴史の研究にどう使われるのか、どう使ったらよいのか、その頃はほとんど何も考えなかった。

だが、多分、その頃の調査の成果も、きつとほんの少しは板碑の研究に役立っていて、この本にも反映しているのではないかなと思っている。

1. 『板碑概説』から『板碑源流考』まで

関東地方をはじめとして宮城県、徳島県、そして九州などに多く残される中世の石塔の中に、「板碑」とよばれるものがある。地域によって石材に違いがあり、それにも影響されて形が変わっていたりするが、おおむね板状の石に梵字と銘文が刻まれたものである。他の多くの石塔が立体的に造られるのに対して、板碑は文字通り板状に造られることが一般的である。

この板碑を調査し報告をした研究者は、青森の中村良之進氏、山形の川崎浩良氏や岩手の司東真雄氏、宮城の松本源吉氏などの東北地方の先駆者の方々、関東の中島利一郎、三輪善之助、篠崎四郎、守屋潔の各氏、京都の川勝政太郎氏など、太平洋戦争以前から全国に数多くいるが、板碑がもつともたくさん残る関東地方を基盤として調査研究し、戦前から戦後にかけて、いわば第一世代の研究者として特に著名なのは、服部清五郎氏(清道, 1904～97)、稲村坦元氏(1893～1997)と千々和實(1903～85)の3人であろうか。

服部氏は、昭和初めの若い頃から板碑の研究をし、1933年、29歳の若さで『板碑概説』の大著を出版した。この本は、戦後の1972年に一部修正等をして、再刊されている。また、稲村氏も戦前、埼玉県史の編纂のために県内各地の板碑の調査を実施し、それをも重要な史料として『埼玉県史 三、鎌倉時代』(1933)・『埼玉県史 四、関東管領時代』(1934)を編纂し、戦後には『武蔵野の青石塔婆』(1959年、埼玉県郷土文化会)などの著作がある。

しかし千々和は、群馬県師範学校の教員として群馬県に赴任し、群馬の考古学者である相川龍雄氏と親しくして、県内の板碑の集成をほぼ完成していたのだが、戦時中にやむを得ない事情から群馬を離れて東京に移ったため、『上野国板碑集録』の自家版を最初に出版したのは1966年のことであり、それに先行して『武蔵国板碑集録 1』をガリ版で1956年に発行していた。その後、埼玉や東京の板碑調査団を組織して調査を進め、『武蔵国板碑集録 2』を小宮山書店から1968年に、『武蔵国板碑集録 3』は雄山閣から1972年に刊行した。そして、やっと念願の『上野国板碑集録(全)』を西北出版

「まえがき」にかえて

から刊行できたのは、1977年のことだった。このように、板碑の調査成果の資料集は何冊も出版していたのだが、ついに生前に板碑についての研究書・論文集を上梓することはなかった。彼には板碑の研究書を出すためのものになる論文がないわけではなく、ただ、自分自身でそれらをまとめて手をいれて本にする意思がなかった、ということに尽きる。それで彼の死後、何人かの方々と相談して、私が編集することになった。一周忌にはとても間に合わなかったが、掲載論文の選択と構成の作業を何とか終えて、吉川弘文館に原稿を渡して出版をお願いした。校正作業は私の姉の柴崎矩子が手伝ってくれたので、1987年、三回忌にあわせて偲ぶ会を催し、出席した方々に差し上げることができた。この『板碑源流考』は、ありがたいことに、3回も版、刷りを重ねることができたので、初版本にあったいくつもの誤字、脱字は、かなり訂正することができたと思う。さらにこの本は、完売後に吉川弘文館がオンデマンド版での発行に踏み切ってくれた。定価が高くはなったが、それでもこの本を出し続ける決断を下さった吉川弘文館の心意気には、遺族の一人として、心から感謝をしている。

2. 坂詰秀一氏のお仕事に学ぶ

第二世代の研究者としてあげるべき方々は、各地におられて、あまりにも多い。その中で、私が直接・間接に学ばせていただいた何人かの方々について、記すことにしたい。

もちろん最初に、坂詰秀一氏をあげなければならない。坂詰氏は、日本国内にとどまらず釈迦の聖地を調査するなど、その行動力、指導力と学識の深さ、豊かさは、他に比べられる人を知らない。私が板碑の研究を始めるにあたっての最高の導きの糸は、実は坂詰氏が聞き手として次々に先達の研究者との座談会を組織された「対談集」だった。つまり、『仏教考古学講座』の復刻版4冊(雄山閣出版、1970年)に付録としてついていた「対談集」である。

大学の民主化闘争からいつの間にかはぐれて落伍し、封鎖が続いて授業も行われぬ中、学問の世界から遠く離れて展望も見えないまま、ひたすら板碑調査とその成果の整理の手伝いをしていた時期、その経験を核にしてなんとか卒業論文をまとめようと思ったとき、学問的知識がなく研究史整理さえできない私が最初にすぎたのが、この「対談集」だった。多分、私と同様にこの「対談集」が大いに役立った人は多かったに違いない。全巻の「対談集」4編が1冊にまとめられて、翌年にはもう、『シンポジウム仏教考古学序説』(坂詰秀一編、雄山閣出版)として出版されたのだから。

もし、あの年に、ちょうどこのすばらしい企画がされていなければ、私は卒業論文を書けなかっただろう。坂詰氏は、研究史を何より大切にされる方だ。だから、いわば研究史整理としてあの「対談集」を編纂したのではないか。私は研究史を整理する手法は、誰にも教えてもらえなかったから、あの「対談集」を繰り返し読んで、板碑・石塔の研究史を学ばせていただいた。

そしてその後、坂詰氏は、『板碑の総合研究』の『総論編』(柏書房、1983年)と『地域編』(柏書房、1983年)の2冊を企画、出版された。この2冊は、板碑の日本列島全体でのありようを視野に取っており、戦後の板碑研究の上では、特に重要で忘れることのできない画期的な仕事だと思う。残念ながら私は、この本の『総論編』に、せつかく分担執筆の機会をいただきながら、ついに締め切りに間に合わせて原稿を提出することができず、載せていただく機会を失ってしまった。今でも、申し訳なく、また口惜しい思いをぬぐえずにいる。当時の研究仲間、いわば、第三世代というべきか、縣敏夫

氏「板碑研究史」と、星野昌治氏「神道の板碑」が『総論編』に、さらに有元修一(「埼玉県」)・肥留間博(「東京都」)・渡邊美彦(「神奈川県」)の各氏が『地域編』の担当の原稿を完成しておられて、立派だな、うらやましいな、と思う気持ちは、30年をすぎた今でも心の中に抱え続けている。

3. 戦後第二世代の板碑研究者

『板碑の総合研究』の『地域編』に執筆された各地の第二世代の方々の中で、直接に私がお目にかかったことがあるのは、岩手の司東真雄氏、山形の川崎利夫氏、新潟の小野田政雄氏、山梨の持田友宏氏、京都・兵庫の福澤邦夫氏の5人であろうか。いずれも、対象地域の中を熟知された方々だった。

小野田氏はその後、越後・奥山荘の調査で直接にいろいろご教示をいただいた。新潟の板碑を、「礮石塔婆」(川原石の塔婆、の意)と独自の名称で呼んでおられたが、この本では、自己主張はされていない。優しいお人柄を、なつかしく思い出す。持田氏は、これより前に『日野市史資料集 板碑編』で、すべての板碑の拓本を図版で提示される仕事をなさっていた。本当に見事な資料集だった。

『総論編』に論文を寄せられた第二世代の方としては、小花波平六、石村喜英、日野一郎の各氏がいらっしやった。皆さん、すでに世を去られているが、それぞれにご指導いただいたり、議論をした、いろいろな思い出がある。

ところで、この世代の方々の中には、調査した板碑の「写真集」や「拓本集」を出される方も多いことに気がついた。私が頂戴し、あるいは購入させてもらったのは、下記のようなものである。ぜひ、ここで参考として書きとめ、紹介させていただきたい。

鈴木道也氏『板碑の美』(西北出版、1977年)

清水長明氏『武蔵板碑図集』(私家版、1989年)

福澤邦夫氏『福澤邦夫石造文化財拓本集(拓本撮影・大木本美通)』(1～4。私家版。編集・鈴木武、藤原良夫。2007～10年)

村田和義氏『東国の図像板碑拓影集』(解説編、図版編、雄山閣、2015年)

縣 敏夫氏『縣敏夫板碑拓本集成図録 1 埼玉県(PDF版)』(CD。杓水舎、2016年)

*縣氏のこのCDは、全3巻で、現在2巻まで刊行されている。

以上のお仕事は、「拓本集」などと銘打ってはいても、解説や所見、さらには論述も詳しいものが多い。そして、さすがにいずれも見事な拓本や写真が収められており、大変に参考になる。

また、『板碑の総合研究』に執筆しておられない方々のうち、第二世代に位置づけられる方としては、大分を調査した望月友善氏や『富山の石造美術』(巧玄出版、1975年)などを出版された京田良志氏や、『青梅市の板碑』(青梅市教育委員会、1980年)などをまとめられた斎藤慎一氏も忘れられない。京田氏の本の表紙には、「刻まれた時と情念」と書かれている。石造物に対する熱い思いが感じられるが、彼は、板碑を「板石塔婆」と呼ぶ。私が「板碑を板石塔婆などと、戦後新たに作った名称で呼ぶのは、間違いだ」というような意味のことを書いた文章をお読みになって、わざわざお叱りの書状を下された。私の考えは変わらないが、ご主張はもっともなところがあり、本当に偉い方だと思った。手紙だけで、お目にかかっていないのが、とても残念である。

このように書いて来れば、私たちの世代が板碑の調査・研究の第三世代である、と位置づけられる

「まえがき」にかえて

ことは、明瞭である。だが、誰であっても、自分のことはなかなか分析できないものだ。ここでは、それは飛ばして、次に、本書の役割について考えることを記させていただくことにしたい。

4. 本書の役割について

「板碑を見ると、これがわかる、あれがわかる。」そして、「地域別に異なる考え方を、この本で、地域に根ざした調査、研究をしておられた方々から、ご自分の研究方法と経験とを示していただいた……」というような書き出しで、この前書きを書かなければいけないだろうとずっと考えていた。だが、そのように書くことを、やめた。板碑をめぐる現在の状況は、もっと深刻だと思うからだ。

私は、板碑、という文化財の置かれた現状について、心から案じ、焦りを感じている。それは、数年前、「高校日本史」の教科書全てから「板碑」についての記述が消えてしまったことに集中してあらわれていると思う。いわゆる内容の精選と、近現代重視に伴う変化なのだろう。別に、高校教科書なんて、どうでもよいだろう、と研究者の方々の多くは思うのかもしれないが、そうだろうか。

そのことと多分リンクして、たとえば、現在、板碑について書かれた本も、その多くが版元切れとなり、古書店や古書のサイトで買う以外に購入の方法がなく、書店で普通に入手できるのは、私が10年ほど前に執筆した、山川出版社ブックレット『板碑と石塔の祈り』だけになっているらしい。これはとても薄い本で、厳しい原稿枚数制限の中で、板碑についてできるだけ簡潔に書いたものだ。新知見は盛り込んだものの、研究者に読んでもらうのを第一義的に書いた本ではない(その割には、表現が難しすぎるから、困ったものだ)。それから、千々和實の『板碑源流考』は、前述したように幸いにオンデマンドという方法で吉川弘文館が出版を続けてくれている。だが、いわば注文出版のような販売方法で、定価も高いとあっては、売れることを期待することはできない。

もちろん、本が売れるか売れないかは、私たち研究者にとっては、正直に言えば、どうでもよいことだが、一番深刻なのは、こうした状況の中では、「板碑」というものを見た、聞いた、という若者が、大学生が、実は、どんどん少なくなっているだろう、ということではないか。

かつて私が若かったころ、父の書いた板碑についての文章を読まされるたびに、慨嘆したことを思い出す。「板碑は、日本の中世を知る上で、大事な史料だ」と、こんな、同じフレーズばかり書いても、しょうがないじゃないか。勝負は、もっと具体的に、歴史を解明した史料として、板碑がどう役に立っているのか、だろう。それを、どのように表現するのか、だろう、と。

今、かつて私が父に対して吐いた言葉が、そのまま自分にはね返ってきているように感じている。でも私には、十分には果たせなかった課題だが、本書で、多くの執筆者の方々が、それと向かい合っただけだった。

5. 今、「ここ」にある板碑は、元はどこにあったのか

高度成長に伴う開発の嵐の中、日本列島のあちこちで、文化財破壊の問題が起こった。それは現在でも、きわめて重要な問題なのだが、板碑に関しては、多少違う問題もあるのではないかと感じることもある。それは、「板碑の移動」についてである。

「板碑文化圏」という考え方に立つ私としては、困った問題で、ある県に、たったひとつだけ、孤立して存在する武蔵型板碑があるとき、それをどう考えるか、ということも一つだ。それはつまり、その板碑が中世におけるその地域の文化のあらわれなのかどうか、ということになる。さらにもっとはつきりと言えば、それを中世における板碑の移動、持ち運びと考えてよいのかどうか、ということだ。

私が聞いた、あるいは直接に見た、という板碑で言えば、北海道の網走、石川県、三重県などの板碑である。そして「板碑文化圏」という考え方からすれば飛び地になる長野県飯田市の板碑も、これに加えて検討すべきなのかもしれない。

武蔵型板碑の分布の境界に建つあるお寺で、既知の板碑を調査していたところ、ご住職から、「本堂にも板碑がある」と聞いて、「さあ、新資料だ」と色めき立って拝見した私たちに、ご住職は、「これは、最近、京都の古美術商から買ったものさ」とあっさりと言われた。

オークションに、板碑や一石五輪塔などが出品されていることは、私も目にしたことがある。それらが売買されたあと、その購入者にたとえ悪意がなくても、何世代かを経て、あらためて世間に公開されれば、それは旧所在地を間違われはしないか。考え始めると、恐ろしいことだ。

だが、武蔵型板碑は、すでに明治時代には、間違いなく商品として取引されていた。それは内田魯庵の『社会百面相』に書かれているように、さる大人が古物商になにか頼もうとしたところ、この古物商が先に答えて、「大人のご依頼ですが、同じ難題でも定めし風流なことで、どこそこに板碑があるから盗んでこいとか、乃至は……」とあることから明瞭である(千々和到『岩波講座日本歴史』中世1、月報「板碑の史料化とその保存」1975年)。

この内田と同時代の文人に、徳富蘇峰がいる。彼は1924年に大田区山王に居宅を建てて山王草堂と称し、『近世日本国民史』などの著作活動を行った。1986年、大田区はこの旧邸を当時の所有者である静岡新聞社の社主(蘇峰の書生をしていたという)から譲り受け、1988年に山王草堂の保存と公開を目的として大田区立山王草堂記念館を開設した。実はここには、蘇峰やその家族らが集めたコレクションとして、たくさんの板碑があった。

それらの板碑は、どこに行ったのか。ずっと気になっていた。山王草堂が大田区に寄贈された頃、私も区の文化財保護審議会の委員をしていたのだが、板碑の消息等についての情報は、一切伝えてもらえなかったからだ。ところが、それは現在、国学院大学博物館に収蔵されている。つまり板碑は山王草堂から駿府博物館に移されたあと、11年後に国学院大学に寄贈されたという。この板碑群の移転に関わられた方々の思いは存じ上げないが、まずは、よかったというべきだろう。

この、山王草堂の板碑の中には、「南無阿弥陀仏、認阿聖霊」と書かれたものがあった。このことは、『板碑の総合研究 地域編』「東京都」で肥留間氏が指摘しておられて、この板碑はもと狭山村(現東大和市)旧在で、『狭山之栞』に載っている物だとされている。確認したところ、この板碑は、たしかに現在、国学院大学博物館に収められていた。完形のすばらしい名号板碑である。なお、東京都板碑調査のときに61基あった板碑が、そのままそっくり国学院大学に移ったのかどうかは、残念ながらまだ1基ずつの確認ができていないが、担当の内川隆志氏のご教示によれば、現在、その数は71点だという。板碑調査の時に別置されていた板碑もあった、と理解することができよう。

一方、板碑が海外に運ばれた事例も、この文章の執筆中に聞いた。法政大学には、「わが国初の国

「まえがき」にかえて

際日本学研究所の構築」を掲げる国際日本学研究所があり、ヨーロッパ各地に所在する日本の文化遺産を探索しているが、所長の小口雅史氏がブレーメンの博物館を訪ねたところ、そこで板碑3基を見せられたということで、スナップ写真を送って下さった。早速、私よりずっとたくさんの板碑を調査しておられる友人の野口達郎氏にも見てもらって意見をいただいたところ、これは東京の旧西多摩郡(日野市や多摩市あたり)を中心として分布する板碑であろうということだった。別に、突然、板碑が国際化したわけではない。板碑が海外にもあるということは、考えてみれば当たり前で、他にもたくさんあるのではないか。これがいわば氷山の一角だとするならば、今後の課題として、調査と確認は、きつと必要な作業となる。

その優美さで知られる武蔵型板碑、青石塔婆は、その美しさゆえに、各地に散らばってしまうのだ。板碑の研究者としては本当に困ったものだと思うのだが、辛抱強く受けとめるしかない。

私の性格からか、何か暗い文章になってしまった。だが、最近の板碑研究が、低調であるとばかりは言えない。若手の考古学徒が、板碑に関心を寄せてくれているし、明るい話題も、もちろんある。埼玉県小川町の青石の採掘・初期加工の遺跡が、「下里・青山板碑製作遺跡」として国指定になったことだ。でも、そうしたことは、別の執筆者の方々が触れてくれるだろう。私が一番うれしいのは、かつて東北地方の板碑調査で本当にお世話になった大石直正さん、川崎利夫さんの編で『中世奥羽と板碑の世界』が高志書院から出版されてから、もう15年が経つのか、やっと後に続くことができた、と思えたことである。

編者の一人としての責任を、何も果たせないまま、たくさんの執筆者の方々と高志書院の濱久年さんの暖かいお気持ちに甘え、支えられて、この本を世に出させていただく。

つい最近、網走の博物館に、私の教えた卒業生が赴任した。彼との別れの挨拶のとき、網走に最北端の青石の武蔵型板碑がある、という話をしてあげた。この本が出版されたら、それを持って、もう一度、網走に行つてこようかと考えている。

目次

「まえがき」にかえて——千々和 到 i

第1部 板碑づくりの技

板碑の製作技法——三宅 宗議 3

緑泥石片岩の分布と特質——本間 岳史 27

板碑石材の採石・加工場——高橋 好信 45

第2部 武蔵型板碑の分類と編年

12世紀 定型化以前の「板碑」——伊藤 宏之 63

13世紀前半 武蔵型板碑の型式編年——磯野 治司 83

13世紀後半 武蔵型板碑の類型化と分布——村山 卓 105

第3部 武蔵型板碑の編年と地域性 14~15世紀

多摩川流域の板碑——深澤 靖幸 127

多摩地域の伊奈石板碑——本間 岳人 147

下野の板碑——齋藤 弘 169

北武蔵(埼玉県)の板碑——諸岡 勝 183

房総の板碑——倉田 恵津子 197

第4部 板碑の編年と地域性

- 東北地方日本海側の板碑———山口博之 219
- 陸奥北部の板碑———羽柴直人 239
- 北東日本海型板碑の展開と他型式の影響———水澤幸一 265
- 近畿の板碑———本田洋・佐藤亜聖 285
- 畿内北部と山陰地方の板碑———西山昌孝 303
- 畿内周辺部における板碑の展開———伊藤裕偉 313
- 阿波の板碑———西本沙織 333
- 九州の板碑と地域性———原田昭一 353
- あとがき———浅野晴樹 372
- 執筆者一覧